

発表者 2 : 種市 尋宙 (たねいち ひろみち) 富山大学附属病院小児科

演題名 : 新型コロナウイルス感染症から子どもたちを守るために
～本当の敵はどこにいるのか～

メールアドレス :

<略 歴>

1998 年富山医科薬科大学医学部卒業 同大小児科入局

2007 年富山大学博士課程修了

2008 年国立病院機構災害医療センター救命救急科勤務

2019 年富山大学小児科講師

役職

医学博士、小児科専門医、集中治療専門医、日本小児救急医学会代議員、日本 DMAT 隊員

富山市新型コロナウイルス感染症対策検討会議座長

<講演要旨>

これまで小児救急・集中治療に携わる医師として、子どもたちの命に向き合い、様々なウイルス感染による呼吸不全と対峙してきた。それゆえ当初は、このウイルスとの医学的な戦いに備えていた。しかし、対応を進めている中で自分自身を含めた大人たちの対応に違和感を覚えた。突如として全国一斉休校を行う政府、無症状のこどもに被爆や痛みのある様々な検査を重ねる医療者、ドライブスルーPCR 検査で不安におびえる家族への対応などを通して、このウイルス自体が本当に子どもたちにとって直接の敵なのか、という疑問が生まれていた。富山市は第一波で様々な試練に直面した。感染症指定病院のクラスター、高齢者施設のクラスター、小学校のクラスター疑いなどである。感染状況は全国ワースト3であった。

4月に富山市の小学校で全国初の複数児童感染が発生し、学校クラスターの疑いとなり、当該学校は苦しい時間を過ごしていた。幸い、疾患としての問題は一切認めなかった。大きな問題は学校への復帰と、学校とともにいじめ、偏見対策を行った。その経緯の中で、富山市教育委員会と接触する機会があり、学校感染対策を考える場が必要であると相互に認識し、「富山市新型コロナウイルス感染症対策検討会議」が立ち上がった。演者はこの会議の座長を務めた。教育委員会との連携を通して、学校における子どもたちの変化を如実に感じる機会となり、また子どもたちにとっての教育とは何か、感染対策とは何かを教育者と医療者が直接議論する場となった。

現在の体制において、ゼロ密を目指すような感染対策を学校や保育現場に強いることは教育・保育を放棄することとを感じる。混乱期における問題は多岐にわたり、医療者と教育委員会だけで決められるものではない。保護者、地域住民、現場教師など多くの共通認識が必要であり、様々な取り組みを行い、富山市モデルを作成していった。その間、現在に至るまで、国内外を通して医学的評価

を継続的に行ってきたが、やはり「子どもたちは感染しづらく、拡大しづらく、重症化しづらい」ことに変わりはない。そうであるならば、子どもたちはもとの生活に戻すべきであり、「子どもたちの日常を取り戻す」ということがわれわれの目指す方向であり、教育活動、行事を再開するための議論を続けた。必要な感染対策のみとした部活動再開、運動会開催、学習発表会開催、合唱コンクール開催などを進めた。それぞれにリーフレットや医師が作成した独自の指針、FAQなどを現場に示した。夏は猛暑が予想され、マスク着用の強要をしないよう、また登下校・運動時はマスク着用を行わないようメッセージを送った。地域のメディアと連携した情報発信も背中を押してくれた。

英国の変異種の問題など、次から次へと問題が発生し、社会は混乱する。それ自体は仕方のないことではあるが、しかし、それに子どもたちを巻き込んではいけない。子どもたちは何も言えず、我慢し、ひそかに問題を溜め込んでおり、いつ爆発してもおかしくない状況にある。その点に関するいくつかのデータも当日は示す。

感染拡大に伴い、国内は混乱状況にある。しかし、だからこそ冷静に、大人たちが子どもたちのためにすべきことは何かをわが国の未来に目を向けて、当日議論できればと思う。そこには明確にメディアと為政者の役割があると感じている。

われわれ医療者とともに子どもたちのために戦ってほしいと願っている。